

# 夏休みの友

まず最初に断っておきますが、ここにあげている本たちは、決して役に立つ本ではありませんし、このレポートのタイトルにも深い意味はありません。完全な思いつきです。

それどころか役に立つのか立たないのかを乗り越えて、何が書いてあるのかすら理解できないような本も中には登場してくると思います。

しかし、全ての本に共通していることは、何度でも読める。

無愛想だけど読めば読むほど味が出てくる憎めない本たちだということです。

そんな私の生涯の友と呼べる本たちを、あなたにも紹介してくてここに書き記すことにしました。

いつの日か、酒でも飲みながらここにあげた本の話でもできたら嬉しいです。

では、ごゆっくりお楽しみください。

## フロム 「愛するということ」

「愛とは技術である」というフロムのひとことが、この本の全てを物語っている。

言うまでもなく、良書。

## プラトン 「国家」

ひとことで言うなら、読むだけで口喧嘩に強くなれる本である。

「論理」をこの本を読むとトコトン意識させられることになる。

全編対話形式で書かれているので非常に読みやすいのも大きな特徴である。

紀元前の大昔にも、天才たちが善とは？悪とは？と必死に考えていたのだなあと思像すると、どこか微笑ましいと同時に、何千年たっても未だに殺し合いをしている人間の愚かさを感じさせられてしまう良書である。

## トルストイ 「人生論」

愛とは？

生命とは？

という問いに強烈な一撃を与えてくれた良書である。

いかにこれまで自分が愛だと思っていたものが浅かったのか、いかにこれまで自分が生命だと思っていたものが動物的だったのか、あなたも思い知らされることになるかもしれない。

## 子母澤寛 「勝海舟」

ずる賢さにおいて、かの有名な17歳で1億円を稼いだ車椅子の青年以上に私が尊敬しているのが勝海舟である。

勝海舟は貧乏な家の武士に生まれたにも関わらず、最終的には江戸城無血開城の責任者を任されるような大役を仰せつかるまでに登りつめた偉人であり、その裏で幕府の敵となるような人物にまで慕われていたという器の持ち主でもある。

そんな勝海舟の生涯を、物語小説で堪能できる紛れも無い良書。

## 勝海舟 「氷川清話」

私は、気になる人物ができれば、必ずその人が自分で書いた書物を当たるようにしているのだが、そこで見つけたのがこの「氷川清話」だ。

実際には、勝海舟にインタビューしているライターが書いている文章なのだが、その語り口が本人のそれであり、勝海舟関連の本の中で、唯一勝海舟の生が伝わる本である。

子母澤寛の書いた外から見た「勝海舟」ではなく、勝海舟本人の口から出て来る言葉には、やはりなんとも言えない風情があり、静かに心に響き渡るものがある。

初心を失わぬため、節目節目で私はいつも氷川清話を読み返すことにしている。

## 勝小吉 「夢酔独言」

勝小吉は、勝海舟の父であり、「夢酔独言」は小吉が残した唯一の書物である。

小吉は、人情以外は何も無いと言っていいほど、お金も権力も知力も何もない男だったが、そんな彼が勝家の子孫に向けて、「俺みたいにはなるなよ」と自分の人生がいかにアホだったのかをひたすら書き綴ってあるのが、小吉自筆の自伝である「夢酔独言」だ。

そこに書かれている文章には、自己顕示欲にまみれた人に有りがちな嫌味など一切なく、ただひたすらに周りの人達への愛と、生命あることの愉快さが伝わってくる。

人間の魅力は持っているお金の量だったり、社会的な地位だったり、腕力の強さだったり、そんなもので決まるものではない。

そう私に気付かせてくれた良書である。

## キルケゴール 「死に至る病」

この本を読んだ時、私は何年もビジネスの勉強をしているのに結果が出せず、いつまでもさえないサラリーマンでいる自分に若干絶望していたのだが、こんなものまだまだ甘いんだと思い知らされた一冊である。

キルケゴールの絶望は果てしない。

上には上がいるのを思い知るにはもってこいの良書だ。

## 司馬遼太郎 「世に棲む日日」

吉田松陰と高杉晋作の物語である。

私の知る限り日本一アヴァンギャルドだった男は高杉晋作に違いないと勝手に尊敬している人物であり、その理由はこの物語を読めば理解してもらえらると思う。

また、吉田松陰に至っては、政治犯として捉えられた牢獄の中で出会ったヤクザな人々に獄中で学問を教え、出所することにはみんなに先生先生と崇められるようになっていたという逸話の残る変態である。

この時代の人々のエネルギーの凄まじさは完全に常軌を逸しているので、ぜひあなたにも味わってもらいたい。

## ブーバー 「我と汝」

この本を内容を私の言葉でひとことにまとめるなら、こうなる。

「人間は相手のなかに人間味を感じることができれば、たとえ相手が動物やモノであっても家族や友達と同じように愛することができる。しかし、人間は相手の中に人間味を感じることができなければ、たとえ相手が人間であってもモノ同然に何の迷いもなく捨てたり、壊したりすることができる」

あなたならどう感じるだろうか？

いつか聞かせてもらえたら嬉しい。

## ゼックミスタ 「クリティカルシンキング」

この本を読んでから、私は誰かを絶対視したり、TVを絶対視したり、本を絶対視したりと、自分の外から入ってくる情報を絶対視することがなくなったように思う。

私のようにノウハウコレクターになってしまいがちな人には必読の一冊である。

## ショウペンハウエル 「読書について」

つい読書を、受験勉強感覚でやってしまう者には、きっと耳の痛い一冊になることだろう。

読書をするのは、本に書いてあることを暗記するためではない。

そんな当たり前のことを思い出させてくれる一冊である。

しかも驚くほど読みやす、本棚に置いてあると何だかちょっと自分が偉くなったような気分にもしてくれる良書だ。

## 司馬遼太郎 「峠」

河井継之助と聞いて人物が思い浮かぶ人はかなりの変態だろう。

この小説の主人公である河井継之助は、幕末の動乱の中、歴史に大きな名を残すこともなく死んでいった華のないおじさんである。

風俗が大好きでどうしようもないという一面もある、江戸時代のおじさんだ。

しかし、華のない彼が、華がないにも関わらず必死に己の美学を貫き、自分の道を歩み続ける彼の背中が格好良すぎるのだ。

男前とはきっと彼のような人のことを言うのだろう。

これを読んだらまた少し日本を好きになってしまう、そんな良書である。

## ローゼンバーグ 「呼吸による癒やし」

呼吸という常に誰もが必ず行っている当たり前のことを、どこまでも深く書いてある一冊である。

私たちは1日に何万回も呼吸を行っているが、その正しい方法は誰も教えてはくれなかった。

その1回1回の質を少しずつでも上げることができたら、どれだけ大きな変化が私達の体に起こるのか・・・？

日常の質が上がれば、人生の質が上がるということを教えてくれる良書である。

ちなみに、幕末の動乱後、勝海舟は「武道や禅で身に付けた呼吸があったからこそ、俺はどんな難局でも平気だった」と語っている。

## ニール・ストラウス 「ザ・ゲーム」

これはアメリカのナンパ師が書いたノンフィクションである。

アメリカの話なので、若干日本とはテンションが違うが、抽象度を上げて理解することができれば、これ一冊で男が女を口説くために必要なことは全て学べると言えるほどの内容になっている。

翻訳のレベルの低さと、アメリカのテンションについていけるなら、他の恋愛本は全て無視してこれだけを何度も読みなおすことをおすすめする。

そう自信を持って言えるほどの良書である。

## 岡本太郎 「自分の中に毒を持って」

「美しさとは、綺麗であることではない」という岡本太郎のひとこと、その圧倒的な美学にとてつもない衝撃を受けた一冊である。

やはり変態が書いた文章は、おもしろい。

## ルイス・ローレンス 「ジョゼ・モウリーニョ」

ジョゼ・モウリーニョは、プロサッカー選手経験が無いにも関わらず、30代後半で世界有数のサッカークラブのコーチになり、その数年後にはプロサッカー監督になった男である。

そして、プロサッカー監督になって5年もしないうちに、ワールドカップよりもレベルが高い、世界一のサッカークラブを決める大会「UEFAチャンピオンズリーグ」で、彼は優勝を果たす。

それも強豪チームを率いてではなく、ポルトガルの弱小チームを率いて。

これは2004年の出来事であるが、その後10年間ジョゼ・モウリーニョは数々のクラブで結果を残し続け、今では世界有数のギャラの高い監督としての地位を揺るぎないものとしている。

なぜ、サッカー選手として何の実績も無いはずの男が、そこまで結果を出し続けられるのか？

その秘密はこの本を読めばわかる。

私の人生を変えた、紛れも無い良書だ。

## フランクフルト 「夜と霧」

ナチス・ドイツのユダヤ人強制収容所で彼が見たものは「人間」だった……。

良書という言葉が陳腐に感じられるほどの一冊。

人類が絶対に忘れてはいけないこと。

## 橋本武 「一生役立つ学ぶ力」

「学ぶ」とは何かを考えさせられる一冊であると同時に、「教える」とは何かを私は考えさせられた。

「勉強とは頭でするものではなく自分の全存在をかけて行う価値のあることであり、同時に全存在をかけて行わない頭だけの勉強では人は育たない」

そんな著者の声が聞こえてきそうである。

学ぶ人よりも、むしろ教える人に読んでもらいたい良書である。

## オルテガ 「大衆の反逆」

「ふつう」という言葉を皆当たり前に口にするが、「ふつう」って何だろうと考えさせられた一冊である。

私が「ふつう」だと思っているそれは、一体誰基準の「ふつう」なのだろうか？

得てして私たちは今の時代がこれまでで最も優れていて、人間の歴史の頂点に君臨していると錯覚しがちであるが、民主主義とて人間が考えたシステムの1つでしかなく、完璧ではない。

そんなことを考えさせられた良書である。

## 白洲次郎 「プリンシプルのない日本」

とにかく格好良すぎる日本人、それが白洲次郎である。

貴族とはこういう人のことを現す言葉なのではないだろうか？

「大衆の反逆」を読んで、貴族的な生き方をしたいと思ったなら、真っ先に貴族的な生き方の手本として読むことをおすすめする良書である。

## ヤング 「アイデアの作り方」

潔いの一とことに尽きる。

無駄なページが1ページもなく、「解説」を省いたたった60ページの中にアイデアを生み出すために必要なことの全てが詰まっている。

クリエイティブな仕事をする者にとっては、一生の付き合いになる良書である。



## 千田善 「オシムの伝言」

アメリカンなタイプのビジネスセミナーなどでは、ボディランゲージの仕方や、喋り方についての指導までされるそうだが、私はどこかそこに違和感を感じ続けていた。

パワフルなビジネスマンは背筋がピンと伸び、ハキハキと喋り、隙がない。

・・・なんて薄っぺらいんだろう。

そんな私の嫉妬にも似た感情は、TV中継されていた日本代表の試合で画面に映ったイビチャ・オシムを目にした時に吹き飛んでしまった。（イビチャ・オシムはサッカー日本代表の元監督のである）

彼の背中曲がり、動きはノソノソ、口はモゴモゴ。

パワフルなビジネスマンとは似ても似つかない。

しかし、選手たちを見つめる彼の眼光は、戦争から生きて還ってきたうちのじいちゃんと同じくらい鋭く、愛にあふれていた。

背伸びなんてしなくても中身があれば勝手に外に溢れ出てくるんだと、私に確信させてくれたオシムの人となり伝わる良書である。

## 弦本将裕 「動物キャラナビ」

これは、動物占いの本である。

私は占いを盲信しているわけではないが、否定しているわけでもない。

もともと動物占いは四柱推命という歴史ある統計学が元になっているので、70%くらいは当たると言われている。

的中率70%なら、移り変わりやすい人間の感情などよりも余程アテになるではないか。

もちろん感情も、体感も大事だが、自分または他人を1つの生命として思いっきり客観的に把握したい時に、私は動物占いに立ち返るようにしている。

薄っぺらい本が多い占いというジャンルにおいて、珍しく辞典っぽい使い方ができるなど感じることできた良書である。

## 高田純次 「**適当伝説**」

これは本ではなくDVDであるが、あまりにも素晴らしいので紹介せずにはいられなかった。

言葉にするのは野暮。

これはぜひ買って、あなたのその目で確かめてもらいたい。

以上。

いかがでしたか？

本当はジャンルで分けて、用途によって読み分けられるように整理しようかと思ったのですが、やめました。

そうすると、どうしても読む時に余計な下心が混じり、一方向からしか本と触れ合えなくなってしまうからです。

ここにある本に即効性はありません。

じわじわくるやつばかりです。

だからこそ、あせらず、じらされるのを楽しみながら、本と戯れる時間を楽しんでください。

何度読んでも飽きない本しかここにはありませんから、あなたの心が変われば、本から受け取ることのできるものも変わります。

何度でも。

ありがとうございました。

三浦洋之